
月愛づる姫

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月愛づる姫

【Nコード】

N7548D

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

昔、昔、ある所に一人の姫君がいました。姫君は外の世界に憧れ、外の世界に出て一人の妖しと出会いました。これは、妖しでありながら妖しを狩る者と人間の姫君の恋物語。

序章：狩人の誕生（前書き）

夜叉王丸の友人の物語で何れ総集編で出します。

序章：狩人の誕生

時は平安。華やかな暮らしをする貴族達の時代。

……だが、夜は百鬼夜行や魑魅魍魎などの物ノ怪が暴れ人々の心は乱れ山賊などが横暴した。

これに業を煮やした朝廷は山賊や妖しに懸賞金を掛けて妖怪、山賊退治に乗り出した。

その金を目当てに山賊や妖しを狩る者達が現れた。

彼らは人間離れした身体能力と不屈の精神を武器に妖しや山賊達を倒して平和を守った。

彼らは朝廷から与えられた銀の十手を証に全国を周り始めた。

人々は、その者達を畏怖を込めて『狩人』と呼んだ。

第一話：銀の狩人（前書き）

友人の名前が少しダサいかな？

第一話：銀の狩人

男は軽い足取りで近畿道を歩いていた。

男の名は月神斬紅朗。斬紅朗も『狩人』の一人だったが斬紅朗は他の『狩人』とは違い妖しであった。

理由は定かではないが斬紅朗は同族の妖しを狩り続けた。

そのあまり強さに妖し達からは『死神斬紅朗』や『紅の狩人』と呼ばれ恐れられた。

この日は九州の旅を終え奥州に帰る所だった。

「この前、狩った妖しの賞金のお陰でしばらく野宿しないで済みそうだ」

意気揚揚と歩いていたが、

「きゃあー!!!」林の方から女の悲鳴が聞えてきた。

「何だ？」

声の方に向かって見ると、三、四人の山賊達が十六、十七歳の娘を囲んでいた。

「何もそんなに恐がる事はないだろ？ちょっとその可愛い手で俺達の酒に酌をしてくれればいいんだよ」

首領格の男が娘の腕を掴んで引き寄せようとした時であった。

男の頭に黒い陣笠が当たった。

「だ、誰だ!？」

山賊達が少女の手を掴んだまま後ろを見ると斬紅朗が立っていた。

「何だ?てめえは?」

娘の腕を掴んでいた手を離すと斬紅朗に向き直った。

「生憎とお前らのような虫けらに名乗る名はない」

斬紅朗腰から銀の十手を取り出した。

「そ、その、十手は………か、『狩人』の証?!………
に、逃げる!!」

首領を除く全員がその場から逃げ出した。

「………ちつ。臆病者が。てめえ何か俺一人で十分だぜ!」

男は野太刀を抜いて斬紅朗に斬り掛かって来た。

「………遅い」

十手で受け止め太刀を払い落とすと顔面を殴った。

「ぶぐぐら!!--」

男は鼻血を出して倒れた。

「どうだ？まだ痛い目を見ないと分からんか？」

斬紅朗が詰め寄ると男は立ち上がって茫然とする娘を引き寄せると小刀を娘の喉元に押し付けて叫んだ。

「む、娘の命が欲しいなら武器を捨てる！」

斬紅朗は無言で大小の刀と十手を地面に置いて数歩下がった。

「そこを動くなよ！」

男は刀を拾おうと身を屈めた瞬間、斬紅朗は隠していた小柄を男の手に投げた。

「ぐわあ！」

男は痛みの余り娘を掴んでいた腕の力を緩めた。

娘は一瞬の間隙をついて男から放れた瞬間に斬紅朗は素早く鞘から刀を抜くと男の右腕を肘から下に掛けて斬った。

「ぎゃあああああ！お、俺の腕が！？」

血が出る腕を抑えて男はのた打ち回った。

「………失せろ」

ドスの聞いた声で斬紅朗は言った。

「ひ、ひいひいひい！」

男は右腕を抑えながら森林の中に消えた。

第一話：銀の狩人（後書き）

短い話ですが続けて読んで下さい。

第二話・武官、逃亡（前書き）

恐らく二十話にも満たないで終わる物です。

第二話：武官、逃亡

男が去ったのを確認すると刀に付いた薄汚れた血を払った。

ピチャツ・・・血が地面に付着する音がした。

刀を鞘に収めた斬紅朗は初めて正面から娘を見た。

娘は腰を抜かして地面に尻餅を付いていた。

斬紅朗は娘に近づいて片手を差し出した。

娘は一瞬、出された手を取るのを躊躇ったがすぐに斬紅朗が差し出した手を掴んだ。

「・・・・・・・・あ、危ない所を助けて頂いてありがとうございます」

震える足で立ちながら娘は礼の言葉を言って頭を下げた。

「別に通り掛かっただけの事。気にするな」

斬紅朗はそう言って立ち去ろうとした時であった。

「その者！待て！」数人の武官装束を着た男達が走って来た。

「ん？何だ？」武官達は斬紅朗と娘を取り囲んだ。

「貴様だな?! 恐れ多くも先の中納言、芦屋友盛様のご息女、藍璃様をさらったのは?!」

武官達は一斉に刀を抜いた。

「ち、ちよつと待てよ!! 俺はこの娘をさらってなどない!」

斬紅朗は弁解をしたが武官達は聞き入れなかった。

「黙れ! 覚悟しろ!」

武官達は斬紅朗に斬り掛かって来た。

「待て! 俺の話を聞け!」

武官達の刀を避けながら怒鳴ったが武官達は聞く様子はなかった。

「・・・ちつ」

斬紅朗は娘の手を掴むと森林に向かって走った。

「逃げたぞ! 追ええー!」

武官達が追い掛けて来るのが分かった。

しかし、斬紅朗は娘を肩に抱き抱えると凄く速さで武官達を引き離し森林の中へと消えて行った。

第二話・武官、逃亡（後書き）

あまりラブシーンが書けそうにありませんが、お付き合い下さい。

第三話・芦屋藍璃（前書き）

運命的な出会いを想って書いてみました。

第三話・芦屋藍璃

武官達から逃げ切った斬紅朗は近くの山小屋に逃げ込んだ。

「…………たつく。何で俺がこんな目に!!」

斬紅朗は不平を漏らした。

偶々、通り過ぎたから助けたのに人攫いと間違えられたのだから怒るのも無理はない。

「……………」

娘は山小屋に逃げ込んでから何も話さなかった。

「…………おい。何時まで黙り込む気だ」

「……………」

「…………何故あの武官達に追われていたんだ？芦屋藍璃様」

少し皮肉を込めて少女の名前を呼んだ。

芦屋藍璃……………朝廷に仕える左大臣、藤原家の臣下の貴族で類い稀なる手腕で政界を生き抜いて来た名家。

その娘と分かり斬紅朗は少し苛立っていた。

『どうせ屋敷での生活が嫌になって好奇心で逃げ出したんだろっな』
しかし、少女が藍璃が発した言葉は斬紅朗の予想を裏切る言葉だった。

「……………結婚する事になったから」

「……………それであの武官達に追われていたのか」

「……………はい。逃げてる内に気が付いたら山奥に逃げてて引き返そうとしたらさっきの山に襲われて」藍璃はそれを言うと再び黙り込んだ。

「……………で、これからどうするんだ？」

「……………分かりません。どこにも行く当てなど、ありません。……………ただ、あの屋敷には一時も居なくなかったから」

何時の間にか藍璃の瞳からは大粒の涙が流れ落ちていた。

「生まれた時から姫らしく生きろと言われ、屋敷から出して貰えずに一族繁栄の為だと言われ何処ぞの貴族の息子と結婚しろ、……………と言われた屋敷に何か居なくなかったから」

藍璃はその場で蹲って泣き出した。

「……………ハァー」

斬紅朗は頭を掻きながら溜め息を吐いた。

「…………どこにも行く当てがないなら、俺と一緒に奥州に行くか？」

斬紅朗の言葉に藍璃は涙を零しながら顔を上げた。

「…………奥州へ」

奥州は僅か数十年前に桓武天皇の命令を受けた坂上田村麻呂によって征服された未開の地である。

「ああ。そこに俺の知人が居る。理由を話せば面倒を見てくれるはずだ。お前が行きたいって言うなら連れてってやる。どうだ？」

「…………何故、そこまで、見ず知らずの私のために？」

藍璃は見ず知らずの男がここまで自分に肩入れする理由が解らなかつた。

「…………女が困ってる所を見捨てるのは、男じゃない。と知人に言われたからな」

ため息を吐きながら斬紅朗は答えた。

「…………えっぐ、ひっく、えっぐ……………ありがとつございます」

涙を零したが、それは先ほどの冷たい涙ではなく暖かい涙だった。

「あ、の、まだ、貴方の名前を聞いてなかったんですけど……」

裾で涙を拭きながら藍璃は聞いた。

「俺か？俺の名は斬紅朗。月神斬紅朗だ。宜しくな。藍璃」

斬紅朗は様を付けずに藍璃と呼んだ。

「は、はい。宜しくお願ひします。斬紅朗殿」

それが嬉しかったのか藍璃は笑顔で言った。

第三話・芦屋藍璃（後書き）

短くてすみません。

第四話・優しい言葉（前書き）

ほのぼのと物語は流れます。

第四話：優しい言葉

二人で仲良く笑い合っていると……グー。見事なお腹の虫が鳴る音がした。

「……腹が減ってるのか？」

斬紅朗が引き攣る口を抑えながら聞くと藍璃は顔を真っ赤にしながら頷いた。

「……少し待っている。薪と食料を取ってくる」

そう言うと斬紅朗は早足で山小屋を出た。

暫らく山には笑い声が響き渡ったそうだ。

そして一時間後……

「どうだ？美味しいか？」

取って来た野兔を丸嚙りする藍璃を見ながら斬紅朗は言った。

野兔を丸嚙りする姿はとても中納言の姫君とは思えない姿だが斬紅朗には関係なかった。

「はい。とても美味しいです。斬紅朗殿」

藍璃が笑顔で答えた。

斬紅朗はその穢れの無い笑顔が眩しくて目を細めた。

「どうかしましたか？ 斬紅朗殿」

キョトンとした表情で藍璃は言った。

「……い、いや何でもない。それより明日は早いからもう眠れ」

「斬紅朗殿はどうするんですか？」

「俺は起きて火の番をする」

「……でも、そうしたら斬紅朗殿は疲れるのでは？」

襲うのではないかという不安と斬紅朗の身を案じる心配の両方の感情を宿した眼差しで斬紅朗を見た。

「心配するな。お前を置いて消えたりもしないし、襲ったりもしないから安心して眠れ」

幼い子供を寝かす様に優しい口調で言った。

「……分かりました。それではお言葉に甘えて……お休みなさい。斬紅朗殿」

斬紅朗の目を見て安心したのか藍璃は静かに寝息を立てながら眠った。

斬紅朗は藍璃が眠ったのを確認すると静かに自分の着ていた陣羽織

りを肩に被せると再び元の位置に戻り刀を肩に掛けると静かに寝息を立てる藍璃を見始めた。

藍璃が着ていた和服は絹で作られていて端から見ても良い所の姫だと分かるだろう。

『明日、一番で市に行つて旅装束を手に入れないとな』

藍璃にはどんな着物が似合うのか楽しみだと斬紅朗は笑みを浮かべた。

妖である自分が人間のまだ十代の娘に僅かな数時間で心を奪われるとは……………

『歳を取ると情に脆くなると“あいつ”に言われたが本当だな』

ここには居ないが何処かで旅をしている知人に斬紅朗は苦笑を漏らした。

それから夜が明けるまで斬紅朗は藍璃の寝顔を眺め続けた。

第四話：優しい言葉（後書き）

友人とは夜叉王丸の事です。

第五話：初めての外界（前書き）

好奇心旺盛な姫様をイメージして書きました。

第五話：初めての外界

「うわぁー！綺麗………」

藍璃は参道から見える風景に感嘆の声を漏らした。

と言っても周りは森林に囲まれた状態だが、それでも藍璃には初めて見る眺めに嬉しいようだった。

斬紅朗と藍璃は朝の内に京の都を離れ昼頃に伊賀の国に入った。

普通なら二、三日は掛かるが追っ手を心配した斬紅朗が藍璃を背負って驚くべき速さで伊賀の国に入った。

都から出た事の無かった藍璃は初めての外界という未知の世界に感激していた。

「なあ。藍璃」

斬紅朗は近くにあった石の上に座り煙管を吸いながら藍璃に言った。

「何ですか？斬紅朗殿」

腰まで伸びた長い漆黒の髪を揺らしながら藍璃は後ろを振り向いた。

そんな藍璃の姿を見て斬紅朗は目を細めた。

「どうかしましたか？斬紅朗殿？」

藍璃は固まる斬紅朗に首を傾げた。

「……はっ。な、何でもない！」

斬紅朗は慌てて口を開いた。

「と、所で藍璃。これからの事なんだが奥州に行くまでには時間が掛かるから物見遊でもしながら行かないか？」

奥州まではどんなに急いでも半年以上係る。

斬紅朗、一人だけなら三日、四日で着けるが藍璃も一緒だとやはり半年以上は掛かる。

藍璃を背負って行けば簡単だが、斬紅朗はしなかった。

生まれて初めて外の世界に出た藍璃に外の世界を堪能させてやりたかった。

それを分かっていた斬紅朗は藍璃が退屈をしないように物見遊山を出したのだ。

それに知人の言葉が頭の中を往復していたのだ。

『旅つてもんは周りの景色を見て楽しみながらゆっくり目的地に行くものだ。まあ、逃亡生活なら無理だろうがお前なら追っ手が来ても大丈夫だろ？』

鋼鉄製の通常の倍はある煙草を蒸かしながら知人が力説している姿

を思い浮かべる。

『あいつの言う通り。旅は周りを見て楽しみながらゆっくり進むものだな』

苦笑しながら斬紅朗は藍璃の言葉を待った。

「んー……それじゃ、私、伊勢神宮に行つて見たいです！」

「よし！なら行く場所は伊勢神宮だな」

「はい！！」

二人は仲良く参道を歩き始めた。

幸いにも山賊や妖しは出て来ずに藍璃と楽しい時間を過ごせた。

夕刻くらいになってから見つけた荒れ寺に身を寄せて二人は就寝した。

翌日になって二人は身支度を整えて目指す場所である伊賀の国にある伊勢神宮へと足を運んだ。

第五話：初めての外界（後書き）

ラブラブな恋人関係をイメージしました。

第六話：伊勢の化けの野（前書き）

名前は水戸黄門を見て考えました（爆）

第六話：伊勢の化けの野

「……こ、これが、あの伊勢神宮……？」

目の前の荒れ果てた神宮を見て藍璃は呆然とした。

伊勢に来て見ると辺りは台風に遭ったように荒れ果てていた。

田畑は干からびて道々には死体まで転がっていた。

しかし、ただの死体ではなく腸を喰われたような痕跡があった。

「……何があったの？」

藍璃は茫然としていた。

「……妖しだな」

ポツリと斬紅朗が言った。

「えっ？妖しですか？」

「ああ。妖しがこの伊勢に住み着いてるようだな」

長年の狩人生活で周りの破壊された家々を見て斬紅朗は直ぐに察した。

「どんな妖しですか？斬紅朗殿」

「さあ？そこまでは分からん？だが、大きな虫みたいな化け物だな」
如何に斬紅朗でも妖しの正体までは分からないようだが、推測はできた。

「……土蜘蛛じゃよ」

後ろを振り返ると年老いた老婆が立っていた。

「……土蜘蛛がこの伊勢に住み着いておるのじゃよ」

しがれた声で言った。

「……その銀の十手、あんた狩人か？」

斬紅朗の腰に差していた銀の十手を見るち老婆はその場にどけ座した。

「お願いじゃ。旅の御方。どうか、この伊勢をお救い下さい。この通りじゃ」

老婆がどけ座すると次々と村人達が出て来て頭を下げた。

「……私からもお願いします。斬紅朗殿」

藍璃も村人の切なる頼みを聞き入れてくれと頭を下げた。

「……分かった」

溜め息を吐きながらも斬紅朗は承諾した。

土蜘蛛討伐を承諾した斬紅朗と藍璃はその日は村人が用意した宿に泊まり次の日、斬紅朗は藍璃を連れて村人に教えられた洞窟に向かった。

「……………や、やっぱり、妖しの住み家に向っているからなのか、恐いですね。斬紅朗殿」

斬紅朗の着物の裾を強く握りながら藍璃は言った。

「心配するな。藍璃」

怯え強張る藍璃に優しく言いながら斬紅朗は森林の先に進んだ。

森の奥へと進むと村人達が言っていた洞窟に着いた。

洞窟の外からも分かる血の臭いに斬紅朗は顔を顰めた。

「……………ここで待ってる。直ぐに戻る」

藍璃を放れた木の影に隠すと斬紅朗は松明を持ち洞窟の中に入って行った。

第六話・伊勢の化けの野（後書き）

ネーミングセンスですかね？

第七話・土蜘蛛、現る（前書き）

やっと妖怪退治ができました！！

第七話：土蜘蛛、現る

洞窟の奥へと進んで行くと人骨があちらこちらに散らばっていた。

「……………」

斬紅朗は更に奥へと進んで行くと大きないびきが聞えて来た。

斬紅朗は腰の刀に手を掛けると更に進んだ。

更に進むと大きな巨体を地面に寝かせながら眠る化け物がいた。

「……………誰じゃ？わしの昼寝の邪魔をする奴は？」

斬紅朗の足音を聞きつけ眼を覚ましたのか不気味な声が聞えてきた。

「貴様を退治しにやって来た“狩人”だ」

斬紅朗が言つと赤く大きな八つの目玉がギョロリと動いた。

「ほおう。“狩人”か。中々、食いご妙がありそうな奴じゃの」

松明で照らすと巨大な蜘蛛が赤い眼を歪めながら笑っていた。

「くくつ。覚悟しろ」

土蜘蛛は笑いながら口から糸を吐き出した。

「・・・・・・・・」

斬紅朗は後方に飛んで糸を避けた。

「まだまだ！」

土蜘蛛は更に早さを上げて糸を吐き出した。

「・・・・・・・・」

斬紅朗は避け続けたが等々、壁ぎわに追い詰められた。

「くくくつ。さあ、そろそろ食わせて貰おうか！」

土蜘蛛が糸を吐き出そうとした瞬間、斬紅朗は持っていた松明を投げた。

「ふん！そんな火など怖くないわ！」

嘲りながら松明を足で潰して斬紅朗を見るが斬紅朗の姿はなかった。

「な、何！ど、何処にいる?!」

土蜘蛛は慌てふためいた。

「・・・・・・・・真上だ」

土蜘蛛が上を向くと鍾乳石に掴まりながら刀を振り下ろそうとする斬紅朗が見えた。

「何をふざけた事を！」

土蜘蛛が糸を吐いたが斬紅朗は物ともせず糸ごと土蜘蛛の体を一刀両断にした。

「あ、がつ……………ぐつ……………」

両断された土蜘蛛は大きな音を立て地面に倒れた。

「……………依頼完了だな」

土蜘蛛の血を吸った刀を懐から出した紙で拭きながら言った。

「き、貴、様……………妖しの、くせに何故、人間の、味方……………
……………」

最後まで言う前に土蜘蛛は力尽きた。

「……………まあ、色々と事情があつてな」

少し間を置いて斬紅朗は言った。

「斬紅朗殿！大丈夫ですか?!」

洞窟から出ると藍璃が駆け寄って来た。

「……………ああ」

何処か表情が暗い斬紅朗を見て藍璃は心配そうに顔を覗き込んで来

た。

「……………本当に大丈夫ですか？」

心配そうに顔を覗き込んで来た藍璃を見て斬紅朗は苦笑した。

「……………大丈夫だ。それより村人達を早く安心させるぞ」

斬紅朗の表情を見て藍璃は安心したように笑顔になった。

「……………はい！」

先を歩く斬紅朗を見ながら藍璃は嬉しそうに後を追い掛けた。

村に帰った斬紅朗と藍璃は村人達の手厚い出迎えを受けた。

「……………本当に何とお礼を言ったら良いのか」

老婆は斬紅朗と藍璃に深々と礼の言葉と共に頭を下げた。老婆に続

くように村人達が頭を下げた。

「礼の言葉は要らん。仕事だからやったただけだ」

ぶつきら棒に言う斬紅朗に老婆と藍璃は苦笑した。

「・・・行くぞ。藍璃」

陣笠を持つと言った。

「はい。斬紅朗殿」

二人は村人達に見送られながら伊勢を後にした。

第七話・土蜘蛛、現る（後書き）

決着が早くてすみません!?

第八話：悪夢（前書き）

典型的な感じで書きました。

第八話：悪夢

奥州まで残り七日といった所で藍璃は夢を見ていた。

夢の中で藍璃は全身を鮮血で染めていた。

……この血は誰の？

全身を血で染まりながら藍璃は自分でも驚く程に冷静だった。

藍璃は前方を見ると自分を庇うように斬紅朗が立っていた。

体中から鮮血が流れていた。

『斬紅朗殿！？』

声を出そうとしたが口から声が出なかった。

斬紅朗の更に前方には藍璃の婚約者の『藤原将雅』が血で汚れた刀を持っていた。

しかし、その姿は人間の姿ではなかった。

頭からは二本の角が突き出て双眼は赤い血の様な眼を爛々と輝かせていた。

その姿は一年前に藍璃を櫻おうと屋敷に忍び込んできた大江山の酒天童子だった。

酒天童子はまだ立っている斬紅朗に止めを刺そうと刀を振り上げた。

その刹那、

「いやー!？」

藍璃は悲鳴を上げて目を覚ました。

「……………はあ、はあ、はあ」

藍璃は頬に冷たさを感じ頬に触ってみると涙だった。

洞窟を出て無意識に藍璃は辺りを見回して斬紅朗を探した。

「どうした？藍璃」

悲鳴を聞き付け林の中から斬紅朗が出て来た。

藍璃は斬紅朗の無事な姿を見ると安堵の溜め息を吐いた。

『良かった。夢だったのね』

夢だと分かるとその場にへたり込んだ。

「……………何かあったのか？涙なんか流して」

斬紅朗は持っていた薪と魚を置いてしゃがんだ。

「……いいえ。何でもありません」

藍璃は冷静に努めた。

斬紅朗に無駄な心配を掛けたくなかった。

「……なら良いが、あまり無理はするなよ？後、七日くらい歩けば奥州だからな」

疲れを隠していると斬紅朗は思い藍璃を励ました。

「はい。私、顔を洗って来ますね」

そう言っただけで藍璃は立ち上がると河原に向かった。

立ち去る藍璃の後ろ姿を見て斬紅朗は胸がちくりと痛んだ。

「お願いだから夢であって……」

顔を洗いながら藍璃は夢が現実にならない事を祈った。

しかし、この藍璃の願いも虚しく夢は現実になった。

第八話・悪夢（後書き）

ますます王道に嵌ります。

第九話：追っ手、逃亡（前書き）

第二話の題名を少し変えただけの題名ですいません！！

第九話：追っ手、逃亡

悪夢から三日後、岩代の国に入り街道を歩いていた二人は途中で木が近くに合ったので休憩しようとする木に近づいた。

すると、林の中から軽鎧を着た数人の男達が抜刀して出て来た。

「・・・何者だ」

藍璃を後ろに庇いながら斬紅朗は問うたが、男達は答えず斬り掛かって来た。

「・・・ちっ」

斬紅朗は軽く舌打ちし斬り掛かって来た男の一人を居合いで斬り殺すと藍璃の腕を掴み林の中に逃げ込んだ。

斬紅朗一人なら問題は無かったが藍璃も一緒だったので思うように動けない。

後ろを振り向くと男達が追い掛けて来た。

「藍璃。俺が食い止めるからお前は逃げろ」

追いかけてきた男達を斬り殺しながら言った。

「で、でも！」

藍璃は夢が現実になるのではないかと思った。

「良いから早く行け！」

怒鳴られて藍璃は走り出した。

藍璃が走ったのを見て男達は後を追おうとしたが斬紅朗が立ち謀だった。

「……………此処を通りたいなら俺を殺してからにしろ」

不敵に笑いながら刀を構えた。

「むうん！」

上段から斬紅朗は男を唐竹割りに斬り殺した。

斬紅朗の足元には鮮血を流した男達が倒れていた。

「……おい。何時まで影から見ている気だ？」

敵を全て斬り殺すと斬紅朗は木の影に隠れていた人影に言った。

「中々お強いすな」

木の影から二十二、三歳の蒼い狩り衣を来た青年が現われた。

「……何者だ？」

低い声で青年に尋ねた。

「藤原将雅と申します」

青年は上品な声色で答えた。

「……俺に何の用だ？元藍璃の婚約者が」

斬紅朗は皮肉った口調で尋ねる。

「我が許婚の藍璃を連れ去った罪で貴様を殺しに来ました」

口が耳まで一瞬、裂けたのを斬紅朗は見逃さなかった。

「……お前、人間じゃないな」

斬紅朗の言葉に将盛は首を傾げた。

「・・・・・・・・何の事ですか？」

悪魔で呆ける将雅。

「呆けるな。貴様の身体からは快樂の為に殺した人の血の臭いがするぞ」

斬紅朗の言葉に将雅は笑った。

「ふははは！よく見破ったな！」

笑いながら頭から二本の角が生え口は耳の端まで裂け瞳は真っ赤な色になった。

その姿は藍璃が夢で見た酒天童子の姿だった。

第九話：追っ手、逃亡（後書き）

王道街道をまっしぐらって感じます。

第十話・玉楼（前書き）

お茶の玉露で思いついた題名です。

第十話：玉楼

「・・・鬼か」

ぼそりと斬紅朗は言った。

「以下にも！鬼の中の王！玉楼様だ！」

将雅、基い玉楼は笑いながら答えた。

「・・・本物の藤原将雅はどうした？」

分かり切った事だが、遭えて斬紅朗は尋ねた。

「あーあ、そいつなら俺の腹ん中だ」

ポンポンと自分の腹を叩く玉楼。

「・・・死ぬ前のあいつの顔。最高に恐怖で歪んでたな。お陰で今まで喰ってきた人間の中でも特に美味かったぜ」

愉快そうに笑う玉楼に斬紅朗は吐き捨てるように言った。

「・・・糞以下だな。お前は」

そんな斬紅朗に玉楼は気にしなかった。

「はははは！！当たり前だろ？俺は鬼だぜ！糞以下に決まってるだろ！？」

暫らく笑っていたが不意に腰に差していた両刃の剣を抜いて剣先を斬紅朗に向けた。

「俺の正体を知ったからには死んで貰うぜ。老いばれ妖怪」

「この妖刀・反鬼で貴様の首を斬り落して藍璃への手土産にしてやる！」

玉楼は言うのが早いか一気に斬紅朗との距離を縮めるとを乱暴に振り下ろした。

「くっ！！」

予想以上の速さに斬紅朗は刀で受け止められずに反鬼を振り下ろされた。

「・・・へえー。俺の一撃を食らってよく腕だけで済んだな。まあ直ぐに殺すから関係ないがな」

玉楼は左手から大量の血を流しながら右手で刀を構える斬紅朗を見ながら楽しそうに玉楼に付いた血を舐めながら目を細めた。

「・・・・・・・・・・」

斬紅朗は肩で荒い息をしていた。

左手の血とさっきの人間達との戦いのせいで急激に疲れが生じた様だ。

「おら！おら！どうした！老いぼれ！」

玉楼の攻撃を斬紅朗は必死に防いだが意識が朦朧としてきた。

「隙があるぜ！！」

玉楼は斬紅朗の脇腹を深く刺し横に斬った。

「ぐあっ！」

斬紅朗は呻き声を上げて地面に倒れた。

「ほおー。咄嗟に体をずらして急所を外させたか。だが、これまでだ」

玉楼は斬紅朗の首に反鬼を当て振り下ろそうとした時に何を思い付いたのかニヤリと笑った。

「お前を殺したら藍璃も追いそうだから、もう暫らくは生きて貰うぞ」

笑いながら玉楼は斬紅朗の脇腹を蹴った。

『……………藍……………璃』

そこで斬紅朗の意識は途絶えた。

「さあて、藍璃を迎えに行くかな」

玉楼は鬼の姿から人間の姿に変わると斬紅朗を置いて藍璃を探し始めた。

第十話・玉楼（後書き）

玉露は苦すぎでした。

第十一話：別れのキス（前書き）

王道街道から脱出できません！！

第十一話：別れのキス

「・・・・・・・・・・はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

林の中を藍璃は必死に走った。

後ろからは馬に乗った男が藍璃の後を追っていた。

しかし、馬の足には勝てず地面に押し倒された。

「放して！放して！」

手足をばたつかせ男の顔を引っ掻いたり平手打ちをした。

「痛ッ！この女！」

殴られて鉄の味がした。

無理矢理立たされ連れて行かれそうになった。

『助けて！斬紅朗殿！』

藍璃は心の中で斬紅朗の名前を呼んだ。

すると茂みの中から人間の姿に戻った玉楼が男を問答無用で斬り殺した。

「・・・・・・・・大丈夫ですか？藍璃？」

将盛の姿に戻った玉楼は藍璃を心配した。

「ま、将雅殿。……………ど、どうして、貴方が此処に」

藍璃は茫然としていた。

「何故？その様な事は聞かずとも分かるはずですが？婚約者である私が貴女を迎えに行くのは当たり前でしょ？」

笑みを浮かべる玉楼に藍璃は何かを察した。

『将雅殿じゃない!!』

しかし、斬紅朗の事が気になる藍璃。

「……………ざ、斬紅朗殿はどうしたのですか?!」

藍璃は嫌な予感が胸を過ぎった。

「斬紅朗?……………ああ。あの薄汚い妖しの事ですか？奴なら私が一刀の下に斬り伏せましたが？」

冷静な口調で言う玉楼に藍璃は凍り付いた。

「な、何て事をするんですか!? 斬紅朗殿は無事なんですか?!」

顔を蒼白にしながら藍璃は怒鳴った。

「……………恐らく、虫の息ですが生きてるはずですよ」

苦虫を噛んだ様に玉楼は答えた。

「斬紅朗殿に逢わせて下さい!!!」

今にも飛び掛かりそうな勢いだった。

「……分かりました。ではこちらへ」

玉楼は理由を聞こうとしたが、藍璃の迫力に聞くのを止め代わりに手を出したが藍璃は取らずに

「早く逢わせて下さい」

冷たい言葉で返答した。

そんな藍璃に苦笑しながら玉楼は藍璃を案内した。

『お願いだから生きてて下さい！斬紅朗殿！』

藍璃は心の中で斬紅朗の無事を祈った。

玉楼に案内された藍璃は地面に大量の鮮血を出しながら倒れている
斬紅朗を見つけた。

「ざ、斬紅朗殿!？」

悲鳴のような声を上げながら玉楼が止めるのも聞かずに藍璃は斬紅
朗の所に走った。

「斬紅朗殿! 斬紅朗殿! しっかりして下さい!」

鮮血で着ている小袖を汚しながら藍璃は斬紅朗の名を呼び続けた。

「うつ……あ……い……り」

途切れ途切れだが斬紅朗は藍璃の名を呼んだ。

「……良かった」

涙を流して藍璃は喜んだ。

「……妖しの無事も確かめた事だし私と一緒に都に帰りましょ
う? 藍璃」

玉楼は藍璃に手を差し出した。

「……斬紅朗殿をどうする気です?」

斬紅朗を抱きながら藍璃は尋ねた。

「本来ならこの場で首を斬る所ですが、貴女が私と一緒に京の都に帰るなら妖しの命は助けましょう」

藍璃は一度、斬紅朗を見るが直ぐ酒天童子に振り向いた。

「・・・分かりました。貴男と都に帰ります。貴男も約束を守って下さい」

真剣な顔をして藍璃は言った。

「良い答えですね。それでは何かと別れの挨拶などがあるでしょうから私は先に籠で待っていますよ」

玉楼は藍璃と斬紅朗を残し去った。

「・・・斬紅朗殿」

藍璃は斬紅朗を強く抱き締めて謝った。

「・・・私のせいで、こんな目に合わせて・・・ごめんなさい」

藍璃は涙ながらに謝まった。

「これを見て、私を時々、思い出して下さい。短い間でしたけど一緒に旅をして楽しかったです」

そう言つて藍璃は鳳凰の髪留めを斬紅朗の懐に入れ近くの木に身を預けさせた。

「……………ごめんなさい」

藍璃は斬紅朗の冷たい唇に自らの唇を重ねた。

「……………さよなら。斬紅朗殿」

唇を離すと藍璃は振り返らずに走り去った。

「……………くっ！」

冷たい雨が傷に染みて斬紅朗は目を覚ました。

「大丈夫ですか！ 魍月様！ 魍月様！」

朦朧とする意識の中、斬紅朗は自分を呼び掛ける女性を見て意識を失った。

第十一話：別れのキス（後書き）

後、もう少しで終わる予定です。

第十二話：二人の義弟（前書き）

ヤクザ映画で義弟は思いつきました。

第十二話：二人の義弟

斬紅朗は女性が自分を呼ぶ声を聞き目を覚ました。

「お目覚め致しましたか？ 魍月様」

綺麗な十二単衣を着た女性が座り斬紅朗を心配そうに見ていた。

「……………ここは、どこだ？」

辺りを見回して尋ねた。

「……………氷鬼様のお屋敷の離れでございます。 魍月様」

女性は淡々とした口調で答えた。

「お前が俺を運んだのか？ 月夜？」

斬紅朗は女性、月夜に聞いた。

「はい。氷鬼様の命によりお迎えに行つて見た所、血の臭いがしたので、辺りを見回したところ道端で血を流した魍月様が倒れていたのを見つけたのでお連れしました」

「……………そうか。所で氷鬼と風鬼はどうした？」

「……………御前に」

何時の間にか二人の青年が月夜の後ろに立っていた。

「……………お久しぶりです。義兄上」

人の良さそうな青年が斬紅朗に頭を下げた。

「よっ！師匠！」

次に見るからに軽そうな青年が斬紅朗に挨拶をした。

「……………傷の具合はどうですか？義兄上」

氷鬼が月夜の隣に座りながら尋ねてきた。

「ああ。何とか大丈夫だ」

「それは良かった」

三人とも安堵の表情をした。

「……………それより氷鬼。俺の鬼龍刀は、どこだ？」

斬紅朗の言葉に氷鬼は首を傾げた。

「……………鬼龍刀でしたら蔵の中ですが」

「……………直ぐに持って来てくれ。久しぶりに使える奴に出会えた」

口の端まで裂けた様に見えた。

「……師匠を傷つけ連れのお姫さんを連れ去った愚か者の事ですか？」

風鬼が聞くと

「……ああ。最近、玉楼とか言う餓鬼にやられた」

「っで、どうする積もりですか？師匠？」

風鬼が楽しそうに聞いてきた。

「……無論。藍璃を取り戻して傷の恨みを晴らすに決まってるだろ」

不気味な笑みを浮かべた斬紅朗の姿は月神斬紅朗ではなく妖しの王、月神の魍月の姿だった。

「……畏まりました。直ぐに持って来てます」

聞き終えると氷鬼は月夜に命じて蔵に行かせた。

数刻し月夜が紫の布に包まれた大太刀を持って来た。

「……鬼龍刀を持って参りました」

両手を上げ斬紅朗に渡し部屋を後にした。

太刀を受け取ると布を取り漆黒の鞘に入った大太刀が姿を現わした。

「……久しいな。 魍月」

鬼龍刀が喋った。

「……ああ。 早速で悪いが力を貸せ」

斬紅朗の言葉に鬼龍刀は

「……ならば、うぬの血を吸わせろ。 喉が渴いた」

「……ふん。 吸いたいだけ吸え」

斬紅朗は左手で無造作に鬼龍刀を掴んだ。

左手からは血が流れたが床には落ちず全て鬼龍刀に吸われた。

「……相変わらず極上の血だな」

それを聞き斬紅朗は鞘に収めた。

「……風鬼、氷鬼。明日、京の都に向かう。二人とも準備をし
る」

斬紅朗の言葉に二人は畏まって頷くと部屋から出て行った。

「……必ず助けだすからな。藍璃」

皆が出て行くと斬紅朗は懐から鳳凰の髪留めを取り出して握り締め
た。

第十二話：二人の義弟（後書き）

二人の名前が悪すぎですいません。

第十三話：丑三つの刻（前書き）

題名、また映画の丑三つの刻をそのまま頂きました。

第十三話：丑三つの刻

翌日、三人は馬に乗り京の都に向かった。

普通なら二、三ヶ月は係るが三人は僅か三日で着いた。

「……あの屋敷に藍璃は軟禁されているのか？」

斬紅朗は斥候から帰ってきた風鬼に聞いた。

「……はい。屋敷には俺らが来るのを予測してか僧や陰陽師の姿も見掛けました」

風鬼は淡々と答えた。

「……ふん。高が人間ごときに私達を調服できると思っているのか？目に物、見せて暮れるわ」

氷鬼と風鬼は口元に邪悪な笑みを浮かべた。

「……丑三つの刻に藍璃を迎えに行くぞ」

鬼龍刀を背中に掛けた斬紅朗は静かに言うと姿を消し二人も同じように消えた。

……丑三つの刻。それは魑魅魍魎、百鬼夜行などの妖しの物達が動く時間。

丑三つの刻になり三人は屋敷の前に立っていた。

斬紅朗の手には鬼龍刀が氷鬼の手には十文字槍が風鬼の手には上下に逆向きに付けられた薙刀が握られていた。

「氷鬼、あの門を壊せ」

斬紅朗の命令に氷鬼は頷くと槍を後ろに下げ勢い良く空を突いた。

「氷撃刃！」

槍から無数の氷の刃が出て来て門に向かって飛んだ。

僧や陰陽師は呪文を唱え結界を張ったが虚しく破られ数人の僧や陰陽師が串刺しになり門を突き破った。

「……行くぞ」

三人は間を置かず走り出すと一気に屋敷の中に入り中に入った。

「妖しだ！妖しの物が来たぞ！」

隊長格の男が三人を囲む様に言った。

「斬れ！斬り殺せ！」

全員が抜刀して三人に襲い掛かった。

「……愚か者が」

斬紅朗は嘲笑して鬼龍刀で一気に数人を両断した。

「……私達も殺りますか？風鬼」

「応う!？」

氷鬼は次々と兵士を串刺しに風鬼は疾風の様に兵士の首を斬った。

しかし、数分しても数は減らなかった。

「ちっ！幾ら斬っても蟻の様に来やがって！」

風鬼は愚痴を溢しながら両刃の薙刀を振り敵を斬り殺した。

「……義兄上。ここは私と風鬼に任せて義兄上は姫君を助けに」

斬紅朗に背中を預けながら言った。

「……後は任せた」

斬紅朗は兵士達を飛び越えると屋敷の奥へ走った。

「……風鬼」

氷鬼は風鬼と背中を向かい合わせに敵を斬り殺しながら言った。

「……ああ？何だ？氷鬼？」

「……此処は何としても死守しますよ！」

氷鬼の言葉に風鬼は高笑いした。

「はははは！当たり前だ！誰が通すか！蟻一匹、通さねえよ！」

二人は敵の中に斬り込んだ。

第十三話・丑三つの刻（後書き）

題名がダサくてすみません。

第十四話：対決と終決（前書き）

やっぱる二十話も行きませんでした。

第十四話：対決と終決

屋敷の奥へと進むと襖があった。斬紅朗は襖を蹴り倒すと中に入った。

部屋の中央ではあぐらを掻いて酒を飲みながら左手で藍璃を抱く玉楼がいた。

「ぞ、斬紅朗殿!？」

藍璃は涙を流して斬紅朗の無事を喜んだ。

「ほおう。生きてたのか？老いぼれ」

藍璃を抱く腕の力を強くしながら玉楼は斬紅朗を見た。

「藍璃を返して貰おうか？餓鬼？」斬紅朗が言うと玉楼は高笑いをした。

「奪ってみな？最も老いぼれには無理だろうかな」

玉楼は藍璃の顎を掴んで唇を奪おうとしたが

「・・・おい。その汚い手で藍璃に触るな」

斬紅朗の殺気に玉楼は振り向いた。

「何だ？また俺と殺り合う気か？老いぼれ？」

侮蔑の眼差しで斬紅朗を見た。

「……………黙れ。妖しの面汚しが」

斬紅朗は鬼龍刀を構えた。

「けっ！なら今度こそ息の根を止めてやるよ！老いぼれ！」

玉楼は酒を飲んでいた右手を上に掲げると炎が出て来た。炎は斬紅朗に向かって飛んで行った。

「俺の炎で骨も残さず焼き殺してやる！」

炎は円になり斬紅朗に飛び掛かった。

「斬紅朗殿！？」

藍璃は悲鳴を上げた。

「……………鬼龍。この小さな炎を消せ」

「……………承知した」

斬紅朗が鬼龍刀を軽く振ると風が吹き荒れ酒天童子の炎を吹き消した。

「何だと?!」

「こんな火で俺を殺せると思ったか？餓鬼」

鬼龍刀を肩に乗せて笑ってみせた。

「・・・ふん。少しは出来る様になったようだな」

玉楼は乱暴に藍璃を突き飛ばした。

「きゃっ!?!」

藍璃は壁に当たり気を失った。

「・・・貴様」 斬紅朗は怒りを覚えた。

「覚悟しやがれ!」

玉楼は反鬼を抜くと一気に間合いを詰め上段から振り落としたが斬紅朗は軽く避けた。

「おら!おら!どうした!老いぼれ!」

玉楼は適確に攻撃したが斬紅朗は全て避けし続けた。

「何時まで避けてる積もりだ!老いぼれ!」

玉楼は乱暴に大きく振り隙が出来た。

斬紅朗はその隙を見逃さず玉楼の腹を斬った。

「ちっ!てめえ!」

玉楼は激怒して更に乱暴だが攻撃の数を増やした。

「……等々、追い詰めたぞ！老いばれ！」

斬紅朗は壁ぎわに追い詰められた。

「最後に言い残す事はあるか？老いばれ？藍璃なら心配するな。俺がしつかり面倒を見てやるよ」

玉楼は笑いながら言った。

「……それはこっちの台詞だ」

斬紅朗の言葉に玉楼は無造作に反鬼を振り落とした。

しかし、反鬼は床に当たっただけであった。

「……遅いな」

振り向くと斬紅朗が立っていた。

「こしゃくな！」

玉楼は反鬼を横に振ったが無造作に腕を掴まれ

グシャツ……

不気味な音がした。

「あ……あああああ！お、俺の腕が！」

玉楼は肘から下に掛けてない右腕を抑えて悲鳴を上げた。

「よ、よくも俺の腕を！許さん！」

左手で反鬼を掴むと横に振ったが斬紅朗は軽く避けると上段から玉楼を袈裟がけに斬った。

「があっ！」

玉楼は床に倒れた。

その時、斬紅朗の瞳の色が黒から真紅の瞳になっているのを見た。

「……真紅の瞳。それは妖しの世界では王の証。

「し、真紅の瞳、ま、まさか、あ、貴方様は、よ、妖怪王、り、魍
……」

最後まで言う前に斬紅朗に首を斬られた。

「……俺の名は斬紅朗。只の『狩人』だ。妖しの王などではない」

鬼龍刀を鞘に収めながら斬紅朗は言った。

第十四話：対決と終決（後書き）

後、二話で終わる予定です。

第十五話：遠い未来（前書き）

これで本編は終わりです。

第十五話：遠い未来

「……………痛ッ」

藍璃は頭痛を感じながら目を覚ました。

「……………気が付いたか？藍璃？」

藍璃は自分が斬紅朗の膝の上にいる事に気づいた。

「……………斬紅朗殿？」

藍璃は夢を見ているかと思った。

しかし唇に温かい感触を感じ夢ではないと分かった。

「斬紅朗殿！？」

藍璃は泣きながら斬紅朗の温かい胸に飛び付いた。

「……………迎えに来たぞ。藍璃」

両手で優しく抱き締めながら斬紅朗は言った。

「……………藍璃。俺はお前を放したくない。俺と一緒に奥州に来てくれ。……………だが、お前が嫌なら俺は二度とお前の前には現わさない」

斬紅朗の腰に細い腕を廻しきつく握った。

「……私も斬紅朗殿と一緒にいたい。私を奥州に連れて行って下さい。貴方と一緒にいきたい」

藍璃の言葉に斬紅朗は頷いた。

「……分かった。必ずお前を幸せにしてやるからな。藍璃」

暫らく二人は抱き締め合った。

屋敷の外に行くと三等の馬を引き連れて氷鬼と風鬼が立っていた。

「どうぞやら取り返したようですね。義兄上」

「……ああ。藍璃。こいつは義理の弟の氷鬼。こっちが弟子の風鬼だ」

「初めまして。芦谷藍璃です」

「可愛い！師匠が熱を上げる訳だ！」

風鬼が辛かった様に言うと斬紅朗は鬼龍刀を抜いた。

「やっば！逃げるぞ！氷鬼！？」

二人は馬に乗ると走り出した。

「待てー！」

斬紅朗は素早く馬に乗り藍璃を引き上げると走り出した。

「うわぁ！き、来た！」

二人は更に馬のスピードを上げた。

「待てー！」 斬紅朗もスピードを上げた。

四人は笑いながら京の都を後にした。

「しっかりと掴まってるよ。 月牙」

片手でたずなを操りながら斬紅朗は左手に抱えてる子供に言った。

「はい！お父さま！」 元気に返事したのは藍璃との間に出来た息

子の小太郎だった。

峠道を走り終えると斬紅朗は屋敷へと馬を走らせた。

「…………お帰りなさい。月牙。斬紅朗殿」

屋敷に着くと綺麗な十二単衣に身を包んだ藍璃が出て来た。藍璃の長い黒髪には鳳凰の髪留めがあった。

「ただいま帰りました！お母さま！」

馬から降りた月牙は藍璃に抱き付いた。

「ねえ。お母さま。またお父さまとお母さまの旅のお話を聞かせて下さい」

月牙がねだって来た。

「良いわよ。今日はどの国からお話しようか？」

藍璃は笑いながら月牙の手を掴んだ。

月牙は藍璃の掴んでない片方の手を斬紅朗に差し出した。

斬紅朗は月牙の手を掴むと三人で屋敷の中に入って行った。

三人が屋敷に入った後、庭に植えてあった桜の木から桜の花びらが舞い落ちた。

第十五話：遠い未来（後書き）

まだ続くのでもう少し付き合ってください。

エピソード・月愛づる姫（前書き）

これにて月愛づる姫は終了です。

今までお付き合いたさりありがとうございますでした。

エピソード：月愛づる姫

……昔、昔、ある所に妖しに攫われて奥州まで連れて行かれた貴族の姫君がいました。

その姫君は裕福な家に生まれましたが、と在る貴族の若君と結婚する事になり屋敷を逃げ出しました。

しかし、屋敷から逃げ出しましたが何処にも行く当てのない姫君は困っていました。

そこへ妖しが現われ姫君を色々な国へ連れて行ってくれました。

姫君は、次第に妖しの事が好きになっていき『この旅がずっと続いてくれたらと思うようになりました。』

……しかし、姫君の婚約者が現われて妖しに重傷を負わせました。

姫君は妖しを助ける為に婚約者と一緒に都に帰る事を泣く泣く承諾しました。

傷を負った妖しは仲間に助けられ傷を癒すと姫を助けに都に行きました。

そこで見事に婚約者を倒し姫を助け出しました。

姫をさらった妖しと姫はその後、奥州に渡り夫婦になりました。

それから数年して二人の間には元気な男の子が生まれて三人は仲良

く幸せに暮らしました。

……古来より月は魔とされておりまして。

妖しを愛した姫君を人々は月を愛する姫と頌詞『月愛づる姫』と言ったそうです。

……これは遠い昔の妖しと姫君のお話。

完

エピソード・月變づる姫（後書き）

後は番外編でお楽しみ下さい。

番外編：永久に貴方と一緒に（前書き）

まだ新婚ラブラブの二人です。

番外編：永久に貴方と一緒に

「……藍璃？」

斬紅朗は朝の光で目を覚ました。

結婚してから一年が過ぎ何時も藍璃を自分の横に寝かせて目を覚ますと藍璃の寝顔があるのに今日は居ない。

不振に思っただけを探していると縁側で湯で少し濡らした漆黒の髪を櫛で梳かす藍璃の姿がいた。

「……あつ、おはようございます。斬紅朗殿」

斬紅朗の姿を見ると藍璃は頭を下げた。

藍璃は白い寝巻姿で髪を梳かしていた為に綺麗より生々しさの方が強い。

「おはよう。藍璃。来な、俺が梳かしてやるよ」

斬紅朗が手招きをした。

これ以上、あんな姿を縁側に出したくなかったのだ。

「はい！」

そんな事も知らずに藍璃は嬉しそうに近づいた。

「前より艶が出たな」

藍璃を自分の膝に据わらせ櫛で髪を梳かしながら言った。

「有難うございます」

首を動かしながら礼の言葉を言う藍璃。

身体からは黒方の香の匂いが漂ってきた。

『藍璃にそっくりの匂いだ』

そんな事を思いながら櫛を動かしていると

「……ねえ。旦那さま」

藍璃が旦那さまと呼ぶ時は願い事がある時だ。

「何だ？奥方様？」

斬紅朗も答えた。

「……これからも、ずっと私の傍で髪を梳いてくれませんか？」

藍璃は上目使いで斬紅朗を見た。

「……喜んで、させて頂きます。奥方様」

斬紅朗は藍璃の髪に口付けをした。

・
・
・
・
・
・
相変わらずお熱いお二人の朝でした。

番外編：永久に貴方と一緒に（後書き）

また番外編で会いましょう。

番外編：初めての祭り（前書き）

伊勢編の付け足しです。

番外編：初めての祭り

伊勢を後にした斬紅朗と藍璃は尾張に来ていた。

「・・・ハア。良いお湯だった」

昼間の内に尾張に着いた二人は早めに宿を取った。

宿に着くなり斬紅朗は伊勢で狩った土蜘蛛の賞金を受け取りにに役所に向かった。

藍璃は斬紅朗を待っている間に風呂に入っていた。

「よお。藍璃。風呂に入ってたのか？」

部屋に帰って見ると斬紅朗が煙管を吸っていた。

「あ、お帰りなさい。斬紅朗殿」

濡れた長い髪を拭きながら部屋に入った。

「伊勢で狩った土蜘蛛の賞金、結構高かったよ」

煙管を吸いながら斬紅朗は言った。

「そうですか。良かったですね。斬紅朗殿」

相槌を打つ藍璃。そんな他愛無い話をしていると食事を持った下女

が入って来た。

「お客さまはお祭りに出掛けないのですか？」

盆を置きながら下女が尋ねてきた。

「お祭り？」

藍璃が聞くと下女が笑顔で答えた。

「はい。お連れの方とご一緒に行って見ては如何ですか？」

そう言っつて女中は部屋から出て行つた。

「……お祭りですか」

遠くでやっている祭りの太鼓の音を聞きながら藍璃はポツリと言つた。

「……行って見たいか？藍璃」

「えっ？」

「飯を食つてもまだ寝るには時間がある。行って見るか？」

斬紅朗が言つと藍璃は元気に頷いた。

夕食を食べてから斬紅朗と藍璃は祭りに出かけた。

藍璃は目を輝かせながら祭りを見て回った。

「斬紅朗殿。あの女の人が髪に差している物は何ですか？」

藍璃が斬紅朗に聞いてきた。

「あれは、髪留めと言って結った髪に差す物だ。欲しいのか？」

斬紅朗が尋ねると素直に頷いた。

「……よし。じゃあ、買いに行くか」

斬紅朗は藍璃の手を掴むと藍璃に似合う髪留めを捜し始めた。

藍璃のかんざしを探しに斬紅朗と藍璃は市を捜し回ったが中々みつからなかった。

そして少し奥の所にあった市に向かった。

「……いらつしゃいませ」

老人が笑顔で二人を迎えた。

「この娘に似合う髪留めはないか？」

斬紅朗が藍璃を前に出すと一瞬、老人の顔が驚きの表情になったが直ぐに元の表情に戻った。

「……畏まりました。少々お待ち下さい」

老人は青い布に包まれた物を持って来た。

「……お連れの方に似合う髪留めを持って参りました」

布を左右に分けると翡翠色の鳳凰の形をした髪留めが出て来た。

「……綺麗」

感嘆の声を漏らす藍璃を見ながら斬紅朗は老人に値段を聞いたが、

「……お金は結構でございます」

それを聞いて斬紅朗は首を傾げた。

「このような高価な物を一文も取らずに渡すのは何故だ？」

斬紅朗の問いに少し哀しそうな顔をして答えた。

「…………貴方様のお連れの方が、私の死んだ娘に似ているから
でございますよ」

斬紅朗は目を細めた。

「そのかんざしは娘が嫁に行く時に送ろうとしたのですが、その前
に流行り病で亡くなってしまい私もその時に死にました」

「えっ、それじゃ、お爺さんは……………」

「この世の者ではありません。髪留めが心残りで成仏できません」

藍璃を見て哀しそうな笑みを浮かべる老人。

「…………お連れの方を見た時、死んだ娘が生き返ったと思い
ました」

哀しそうに笑いながら老人は藍璃を見た。

「…………藍璃。その髪留め、貰ってやれ」

斬紅朗の言葉に藍璃は静かに頷いた。

斬紅朗は髪留めを藍璃の髪に差した。

「…………ありがとうございます。これで、もう思い残す事はあ
りません」

老人は笑顔で言うと体が消え始めた。

「な、何で消えるんですか?! 斬紅朗殿!？」

藍璃は斬紅朗に尋ねた。

「……願いが叶ったから消える。それだけだ」

静かに斬紅朗は藍璃の問いに答えた。

「……あの爺さんは、お前にそのかんざしを渡すために待っていたんだよ」

確信したように斬紅朗は言った。

「どうか、お幸せに……」

老人は二人に言うと静かに消え辺りは何も無くなった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

帰り道、二人は何も話さず無言で宿に向かった。

「・・・・・・・・ねえ。斬紅朗殿」

藍璃が沈黙を破った。

「・・・・・・・・何だ」

前を向きながら斬紅朗は聞いた。

「・・・・・・・・あの、お爺さんの娘さんってどんな人だったんでしようね？」

「・・・・・・・・分からない。・・・・・・・・だが、お前のように見ず知らずの人のためにも泣ける心優しい娘だったと思うぜ」

藍璃の頬を伝う真珠の玉を拭くと藍璃の手を掴んで歩き出した。

藍璃は何も言わずに斬紅朗の手を強く握り還した。

番外編：初めての祭り（後書き）

後、一話続きます。

番外編：気付かない恋心（前書き）

初めての祭りの続きです。

番外編：気付かない恋心

尾張を後にした斬紅朗と藍璃は再び奥州を目指して北に向かった。

昨夜の事を気遣い斬紅朗は藍璃を哀しい想いにさせないように奥州な事について話した。

年に一度、国を上げての大祭、罪を犯した罪人に課せられる処罰、女達が機を織りながら歌う童歌。

そんな斬紅朗の気遣いが嬉しかったのか藍璃は斬紅朗が話し終えると同時に質問責めをした。

藍璃の質問に斬紅朗は一つ一つ丁寧に答えた。

そんな二人を太陽が優しく奥州への道を照らしてくれた。

山の中腹辺りで茶店を見つけた斬紅朗は藍璃に休憩を促した。

「お客様達はどちらに向かっているのですか？」

二人に三色団子とお茶を出しながら老婆が聞いて来た。

「上野に向かっている所です」

奥州とは言えずに咄嗟に嘘の場所を藍璃が老婆に言つと老婆は愛想良く笑つた。

「左様でございますか。所で、お一人はどういった関係でございますか？」

老婆の質問に藍璃は戸惑つた。

「主従関係ですか？それとも夫婦ですか？」

夫婦と聞かれ藍璃は顔を赤くした。

「えっ、そ、そんな夫婦なんて……………」

藍璃は戸惑つたが斬紅朗は冷静に否定した。

「……………いや。ただの連れだ」

斬紅朗の言葉に藍璃は傷付いた顔をしたが、老婆は笑つた。

「……………素直じゃありませんな」

老婆の言葉に斬紅朗は金を置き先を歩いた。

「あっ！ま、待って下さいよ！斬紅朗殿！」

急いで市女笠を持って後を追おうとした藍璃を老婆が止めた。

「……………どうか旅中ご無事で」

老婆は藍璃に紫色のお守りを渡した。

「……………はい。お婆さんもお元気で」

笑顔で言うと藍璃は先を歩く斬紅朗を追った。

茶店を後にした二人は気不味い雰囲気を味わいながら山中を歩いた。

夜が近くなりこれ以上歩くのを危険と判断したため野宿に決めた。

火の中に薪を入れながら斬紅朗は取って来た野鳥を焼いた。

「熱いから気を付けろ」

斬紅朗が焼き上がった野鳥を藍璃に渡した。

そんな些細な気遣いでも藍璃は嬉しかった。

食事を済ませた斬紅朗は鞘から刀を抜いて手入れを始めた。

藍璃は膝を抱え斬紅朗の仕草を見つめた。

その時、不意に冷たい風が吹いた。

藍璃は無意識に両腕を重ね合わせた。

「寒いのか？」

手入れを止め藍璃を見た。

「……………はい。少しだけ」

苦笑しながら藍璃は答えた。

「……………寒いのなら」

斬紅朗は自分が羽織っていた羽織りを藍璃の肩に掛けようとした。

「それでは斬紅朗殿が羽織る物が無くなるじゃないですか」

藍璃が断ろうとしたが

「俺は大丈夫だ。心配するな」

斬紅朗は気にするなと笑い優しく羽織りを肩に掛けて言った。

斬紅朗の羽織っていた羽織りは気持ち良かった。

『……………斬紅朗殿の羽織り、暖かい』

そんな風に思っていると藍璃は夢の世界に旅立った。

藍璃が寝たのを確認すると斬紅朗は再び刀の手入れを始めた。

斬紅朗と藍璃は月と松明の明かりを頼りに夜の峠道を歩いていた。

翌朝、山を下りている途中に獵師と出会い次の村までは峠を一つ越えないと分かり二人は急いだが等々、夜になってしまった。

先を急ぎながら斬紅朗は藍璃の歩く早さに合わせ歩いた。

ウォーン！ウォーン！近くで狼の遠吠えが聞こえてきた。

藍璃は急に恐くなりその場に座り込んでしまった。

「どうしたんだ？藍璃」

斬紅朗が後ろを振り向いた。

「こ、恐くなって足が竦んじゃって……」

苦笑しながら立ち上がるうとするが足腰に力が入らず立てない。

「……………」

斬紅朗は何も言わずに近づくとあっさり藍璃を自分の背中に担いだ。つまりおんぶだ。

「斬、斬紅朗殿！」

顔を真っ赤にして藍璃は降りようと暴れた。

「・・・大丈夫だ。気にするな」

斬紅朗は降りようと暴れる藍璃を宥めながら松明を片手に夜道を歩き出した。

「安心しろ。何が遭ってもお前は俺が護ってやる」

初めは嫌がった藍璃も斬紅朗の大きな背中に顔を預け眠り始めた。

藍璃が眠るのを確認すると斬紅朗は驚くべき速さで峠を折り始めた。

峠を降りると近くの洞窟に入ると藍璃を地面に寝かせて火を点け寝ずの番を始めた。

藍璃はそんな事も知らずに幸せそうに眠り続けた。

番外編：気付かない恋心（後書き）

また番外編でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7548d/>

月愛づる姫

2010年10月28日07時36分発行